



高等学校日语教材

主编 / 李光泽

编者 / 高宇飞 高宇航

日 本 文 史

【第二版】

大连理工大学出版社



高等学校日语教材

主编 / 李光泽

编者 / 高宇飞 高宇航

大连理工大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本文学史：日文 / 李光泽主编. — 2 版. — 大连：大连理工大学出版社，2012. 2(2012. 5 年重印)
ISBN 978-7-5611-6718-2

I. ①日… II. ①李… III. ①日语—高等学校—教材
②文学史—日本 IV. ①H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2012)第 009115 号

大连理工大学出版社出版

地址：大连市软件园路 80 号 邮政编码：116023

发行：0411-84708842 邮购：0411-84703636 传真：0411-84701466

E-mail: dutp@dutp.cn URL: <http://www.dutp.cn>

大连美跃彩色印刷有限公司印刷 大连理工大学出版社发行

幅面尺寸：140mm×203mm 印张：8.125 字数：201 千字
印数：14501~15500

2007 年 7 月第 1 版 2012 年 2 月第 2 版
2012 年 5 月第 8 次印刷

责任编辑：宋锦绣 张 凡 责任校对：刘元春 池喆林
封面设计：山野物语

ISBN 978-7-5611-6718-2

定 价：20.00 元

序 言

日本文学具有一千多年的历史，是世界文学宝库的重要组成部分。日本民族在吸收其他民族文化的基础上，创造了具有日本民族特色的日本文化。众所周知，中日两国间的文化交流具有悠久的历史，中国文化对日本文化的形成和发展具有深远的影响。例如，日本在古代后期借用中国汉字的偏旁部首，创造了假名文字，从而使日本古代文学达到了高峰。近年来中日两国间的交往更加频繁，因此，作为日语专业的学生，了解和掌握日本文化是至关重要的。

由于时间所限，各个知识点不能一一详述。为使学生重点掌握各个时代的文学特点和具有代表性的文学作品，决定共分五个年代进行编写，即：古代前期、古代后期、中世、近世、近代，而且采用了“点面结合，重点带一般”的手法。例如，古代前期以《古事记》、《日本书纪》、《万叶集》为重点，对其他作品只做了一般性介绍；古代后期以《源氏物语》和《枕草子》为重点，对《竹取物语》等作品只做一般性介绍；中世文学则以《方丈记》、《徒然草》、《平家物语》为重点，对其他只做简单介绍；近世文学对井原西鹤的小说《浮世草子》、松尾芭蕉的代表作品《奥之细道》、近松门左

卫门的《净琉璃》做了重点介绍，其他做了一般性介绍；近代文学以明治、大正时期的文学为重点，并且突出各个文学流派的代表作家及作品。为了使学​​生便于消化吸收，在每一单元课后都编排了配套练习，并编写了一套综合自测题。

书中对难读的词语标注了读音。

由于时间和水平有限，书中错误在所难免，希望同行及广大读者不吝赐教。

主编 李光泽

编者 高宇飞 高宇航

2012年1月

目次

第一章 古代前期の文学（奈良時代）

第一節 古代前期の文学概観	001
一、文学背景	001
二、口承文学の時代から記載文学の時代へ	002
三、文学の流れ	003
第二節 主な文学作品	004
一、記紀文学『古事記』と『日本書紀』	004
二、『風土記』	006
三、『懷風藻』	006
四、『万葉集』	007
五、『歌経標式』	012
第一章練習問題	013

第二章 古代後期の文学（平安時代）

第一節 古代後期の文学概観	016
一、文学背景	016
二、唐風文化から国風文化へ	017
三、女流文学の開花	018
四、平安末期の文学	018

第二節 主な文学作品	018
一、『古今和歌集』	018
二、『竹取物語』	020
三、『伊勢物語』	022
四、『堤中納言物語』	024
五、『源氏物語』	026
六、『栄花物語』	032
七、『大鏡』	032
八、『今昔物語集』	033
九、紀貫之と『土佐日記』	035
十、『蜻蛉日記』	036
十一、『和泉式部日記』	037
十二、『紫式部日記』	038
十三、『更級日記』	039
十四、清少納言と『枕草子』	041
十五、『日本霊異記』	043
十六、『千載和歌集』	044
十七、『梁塵秘抄』	044
第二章練習問題	045

第三章 中世の文学（鎌倉、室町時代）

第一節 中世の文学概観	047
一、時代背景	047
二、王朝美に対する思慕と憧憬	047
三、仏教の普及と隠者文学の誕生	048
四、説話文学の流行	048
五、軍記物語と新興文学	049

第二節 主な文学流派	049
一、公家貴族の文学	049
二、草庵の文学	052
三、武士、庶民の文学	056
第三章練習問題	063

第四章 近世の文学（江戸時代）

第一節 近世の文学概観	067
一、近世の文学背景	067
第二節 近世の小説	071
一、井原西鶴と浮世草子	071
二、読本	076
三、洒落本、人情本、滑稽本	080
四、草双紙	081
第三節 詩歌	081
一、俳諧	081
二、狂歌と川柳	087
三、国学の興起と国学三大人	089
四、漢学と漢詩文	090
第四節 劇文学	091
一、近松門左衛門と浄瑠璃	091
二、歌舞伎	093
第四章練習問題	095

第五章 近代の文学

第一節 近代の文学概観	099
一、写実主義文学の発足	099

二、紅・露の時代	100
三、ロマン主義文学	100
四、自然主義文学	100
五、明治から大正へ	101
六、大正期の小説	102
七、昭和初期の文学	102
八、戦後の文学	103
第二節 主な作家及び作品	104
一、近代の文学流派及び代表作家	104
二、詩歌	150
三、昭和の小説と評論	163
四、戦後の文学	174
五、昭和三十年代の文学	186
六、昭和四十年代の文学	196
七、昭和五十年代以後の文学	199
第五章練習問題	202
総合模擬テスト（一）	206
総合模擬テスト（二）	212
総合模擬テスト（三）	220
参考答案	228
附录：日本文学史年表	237
参考書目	248

第一章 古代前期の文学 (奈良時代)

第一節 古代前期の文学概観

一、文学背景

(一) 古代前期

おおかた五世紀ごろから八世紀まで、すなわち文学の発生から794年の平安遷都までの間を指す。日本史で古代前期とは大和、飛鳥、奈良時代とも呼ぶ。その中でも、奈良時代を中心としている。この時期を上代とも言う。

(二) 国家の成立

紀元前3世紀に、集団による農耕生活が始まり、各地でだんだん小国家が出てきた。4世紀に、大和朝廷が統一国家成立を成し遂げた。

(三) 律令制の確立

7世紀に、聖徳太子の改革によって、「憲法17条」が定められた。和を尊び、仏教を信じ、天皇に服従すべきことなどを強調して、すべてが国家の統治に有利である。しかも、これまでの大王の称にかわって、天皇の称号が用いられるようになった。さらに、七世紀の後半には、天皇を権利中心とする律令制、つまり、中央集権国家が正式に成立した。やがて、時代の発展に従い、文化の面においても中国大陸の様式を真似して、文化が次第に成熟するようになった。

(四) 遣隋使と遣唐使

7世紀から遣隋使と遣唐使が大陸に頻繁に派遣されて、中日両国の交流がとても盛んである。聖徳太子の時、小野妹^{おののいも}子^こが遣隋使として二度隋^{ずい}に派遣され、中国文化の導入と仏教の興隆に気を使っていた。奈良朝に入ってから、朝廷がさらに頻繁に遣唐使や留学生を中国に派遣して、日本はどんどん中国大陸から中国文化を吸収した。また、日本の留学生も帰国するに際して、唐から大量の書籍を持って帰る。だから、奈良文化の特徴と言え、貴族的文化、^{とうふう}「唐風」であると言えよう。

二、口承文学^{こうしょう}の時代から記載文学^{きさい}の時代へ

ずっと昔、日本の祖先は祭りを通して、共同体を結んでいった。その当時、文字がなくて、祭りの場で、神々や祖先に対して語られ歌われる神聖な言葉は、口々相伝えるより仕方がなく、長い間、子々孫々に言い継ぎ、歌い継いで、伝承されていった。このように誕生した神話^{しんわ}、伝説^{でんせつ}、歌謡^{かよう}、祝詞^{のりと}などを口承文学と言う。口承文学は現在でも存在しており、日本文学の起源を知るのにかなり重要な文学価値を持っている。

大和朝廷は国家を統一すると、さらに政権を固めるために、異国との往来を頻繁にさせた。ことに朝鮮^{ちようせん}、中国との交流がよりいっそう盛んになった。4世紀ごろに、大陸から漢

字が伝わってきたということである。そして、だんだん実用化され、6世紀ごろに、漢字で表記できるようになり、文学作品も漢字によって、記載されるようになった。これは記載文学の始まりである。これによって、日本文学は新しいページを開いたので、口承文学から記載文学時代への変化が画期的な意義を持っている。これらはすべて漢字の伝来のおかげであろう。そのあと、平仮名、片仮名の成立によって、日本人の思想や気持ちが文字で表現できるようになった。もちろん、識字層の世界に限られているが、『万葉集』、『土佐日記』など、独自で多彩な記載文学の展開が始まる。

三、文学の流れ：

- (一) 祝詞：古代人は言霊信仰によって、神への祈りの言葉を祝詞と言う。その中には、神事の時群臣に読み聞かせるものとか、祭りの儀式の時に神に祈願するものとか、天皇に上奏して御代の長久を祈るものなどがある。現存するのは「延喜式」の27編、「台記」の別記に収められた「中臣寿詞」の一編を合わせて、計28編である。
- (二) 宣命：宣命というのは、天皇の詔を臣下に伝える和文体の詞章である。漢文体を詔勅と言うが、純粹の和文体で書かれたのを「宣命書き」と言う。「続日本紀」の62編は現存する宣命である。

第二節 主な文学作品

一、記紀文学 『古事記』と『日本書紀』

(一) 『古事記』

712年に、太安万侶おおのやすまろによって編集されたと言うことである。序文と上、中、下の3巻からなっている。書名は推古天皇すいこてんのう以前を「古代」として、舒明天皇じゅめいてんのう以後を「現代」と考える天武てんむ・元明天皇げんめいてんのう時代の時代観に基づいて、推古天皇以前の「上古の時代の事を記した書」の意で命名したのである。内容としては、天地の創造から第三代推古天皇までの神話・説話・歌謡・皇室の系譜などが記されている。上巻はすべて神話伝説から成り、天地創立の初めから語り出す。中巻は神武天皇じんむてんのうから応神天皇おうじんてんのうまで、下巻は仁徳天皇にんとくてんのうから推古天皇までを収める。変体漢文体を採用し、読者が訓注と音注を頼りに読んでいくと、日本語文として読めるような工夫が凝らされている。漢訳仏典語の多用、六朝小説類に見られる俗語の使用など、新鮮さが認められる。前代の伝説、民衆の生活も含み、そこから古代日本人の考え方や個人感情などを理解することができる。文学性が高い。今まで保存している日本最古の書籍である。

しかし、『古事記』は最高権利者である天皇や皇室などが人民を支配することを目的としているのである。また、『日本書紀』に比べ、その伝本はとても少なく、本居宣長もとおりのりながの『古事記伝』が大成されるまでは、後代の文学への影響はほとんど見られない。

「原作」：天地^{あめつち}初めてひらけし時、高天^{たかま}の原に成れる神の
 名は、天之御中主神^{あめのみなかぬしのかみ}。次に高御産巢日神^{たかみむすひのかみ}。次に神産巢日神^{かみむすひのかみ}。
 この三柱^{みばしら}の神は、みな独神^{ひとりがみ}と成りまして、身を隠したまひき。

——『古事記』冒頭

「現代語訳」：天と地が初めて開けたときに、高天の原に現れたその神は、「天之御中神」と呼ばれている。次の神は高御産巢日神であり、最後は神産巢日神である。この三つの神は、みな独り身で、現し身を隠し、現れない。

（二）『日本書紀』

720年に舍人親王^{とねりしんのう}などが編集したものである。これは漢文体で書いた30巻よりなる歴史書の形をしたものである。中国の史書にならって、漢文^{へんねんたい}の編年体で書かれたものである。『漢書』、『後漢書』などを真似したので、「日本書」というはずであるが、実は表・志・列伝を立てるに至らず、「帝紀」に止まることから、「日本書の紀」の意で命名したものであろう。したがって通称の『日本紀』は実質的な名だと言える。天皇の君主としての地位を正当化する目的で、全体の構想が創作されている。漢文体で日本の歴史を述作した最初の正史である。

奈良時代からすでに宮廷において『日本書紀』の講書が行われ、訓読を施した平安時代以降の古訓を持つ本が多く伝えられ、後代の文学に与えた影響は大きく、特に神代^{かみよ}を素材^{ようきよく}とした謡曲・浄瑠璃^{じょうるり}が多く作られている。

『古事記』と『日本書紀』は日本文学史の中で、最初の整った本の形であろう。記紀文学は人民大衆の文学ではなく、国家最高権利者である天皇、貴族の文学である。しかし、その中から、当時の地方民衆の生活状況や宗教などが分かり、民俗研究の貴重な資料として、かなり大きな価値がある。

また、『古事記』、『日本書紀』には、「まこと」という文学意識が芽生えていた。しかし、それは個人或いは人民大衆の思想感情の表れではなく、大和民族固有の信仰、即ち神への崇拝という原始的な信仰をもとに生まれたのである。言い換えれば、この文学意識は写実の文学意識の芽生えともいえるよう。

二、『風土記』

713年、朝廷が諸国に命じて、その国の地理、産物、伝説などを記させた。日本の最初の地誌である。現在5つがまとまった形で残っている。当時の地方の暮らしを知る手がかりとしても重要である。

また、風土記の文章は地誌とはいうものの、漢籍の知識を利用し、上代の地理的状況だけでなく、文学的状況をも伝える貴重なものである。

三、『懷風藻』

中国大陆文化の強い影響で、日本でもずっと昔から日本人の手によって、数多くの漢詩文がどんどん作られていた。

殊に天智天皇が漢詩文を奨励するゆえに、漢詩文の知識や創作が盛んになりつつある。その当時、漢詩の習得こそが官人としての欠かない教養であった。奈良時代には、たくさんの漢詩集が出てきたが、現存しているのは『懷風藻』である。

『懷風藻』は751年に、編纂された。編者は淡海三船おうみの みふねと言われていたが、定説はない。先哲の遺風を懐おもう意で書名としている。作者はほとんど当時の貴族階級であった。日本の最古の漢詩集として後世によく知られている。その中には、64人の詩120編が収められ、中国六朝りくちょうの古体詩をまねした作品が多い。詩形は五言ごごんを主として、七言しちごんの詩は七首に過ぎない。作品の中には、中国の儒教じゅきょうの思想が明らかに含まれている。殊に『論語ろんご』の中の言葉が大量に引用されていた。そうして、中国の伝統的な文化は日本文学に深い影響を与えたと言っても過言ではない。また、この詩集は『万葉集』の編纂にも深い影響をもたらした。さらに、漢詩と和歌との交流を探る上でも、貴重な遺産と言えよう。

四、『万葉集』

日本最古の歌集であり、その中に収めている歌は約4500首、紀元340年から奈良末期の759年までの間に作られているものであるが、450年の長時間にわたっており、大伴家持やかもちによって編纂されたものだと言われている。命名に関しては、「万よろづの言ことの葉」と「万代よろづよ」の意という二説があるが、定説がない。

内容から見ると、^{ぞう か}雑歌、^{そうもん か}相聞歌、^{ばん か}挽歌、^{ひ ゆ か}比喻歌、^{あづうた}東歌、^{さきもりうた}防人歌などがある。その中には、相聞歌は人間同士の贈答の歌、特に恋愛の歌が多い。挽歌は死者を悼む^{いた}歌である。雑歌はそれ以外の歌や宴席の歌などいろいろなものがある。東歌は東国^{あづまこく}の一般庶民の生活から生まれた民謡的な歌であり、防人歌は東国から九州防備のために、派遣された兵士や家族の歌である。また、形式から見ると、^{ちよう か}長歌、^{たん か}短歌、^{せ どう か}旋頭歌などがある。本文は全て漢字でもって日本語を書いたものである。これを万葉^{まんよう}仮名^{が な}と言う。その以来、日本語の表記があった。『万葉集』は一般的に、四期に分けられている。

万葉一期（発生期） ^{じょめいてんのう}舒明天皇（629年）の時代から^{じんしん}壬申の乱（672年）前後までの間を指す。歌は集団的な生活背景から、個性的な叙情歌へ変わっていった。特徴としては、感動を直接に表現した素朴な風格である。^{こうしつ か じん}皇室歌人が圧倒的
多いが、その中には、^{ねかたのおおきみ}額田王がその中の代表的な女流歌人^{じょりゅう か じん}である。生没年未詳、鏡王の娘、初め大海人皇子^{お お あ ま の み こ}に嫁し、^{とおちの}十市皇女を生んだが、後に天智天皇と結婚した。天智七年（668年）五月五日^{かまう の くすり が}蒲生野の薬狩りの際に、「あかねさす紫の行き^{しめの}標野行き野守りは見ずや君が袖振る」という名文を残し、女流歌人としての才能が出される。

「現代語訳」：紫を栽培してある標で囲んだ野をあちこちに行き、あなたがわたしに袖を振るのを、野守りは見てい
ではないか。